

人生、楽しく。
とにかく楽しく。

1

■大前 研一（おまえけんいち）
（プロフィール）
1943年福岡県生まれ。日立製作所勤務を経て、72年に経営コンサルティング会社マツキンゼー・アンド・カンパニー・インク入社。本社ディレクター、日本支社長、アジア太平洋地区会長を歴任し、95年に退社。以後も世界の企業やアジア・太平洋における国家レベルのアドバイザーとして幅広く活躍するとともに、「ポータレス経済学」と「地域国家論」の提唱者としてグローバルな視点と大胆な発想で活発な提言を行っている。現在は、ビジネス・ブレイクスルー代表取締役、ビジネス・ブレイクスルー大学院大学学長などを務める。趣味はクラリネット、オフロードバイク、スノーモビル、ジェットスキー、スキューバダイビングと多彩。著書は「旅の極意・人生の極意」（講談社）など多数。



「いざ」って、いつなんだ？ 50歳になったら セカンドライフを 具体的に設計してみる

日本人の大半は進学や出世を目的に生きてきた。しかし「それが人生の目的なのか？」と問われると、答えに窮する人が多いはずだ。本当に人生を楽しみ、定年後も安心して生活するための要訣を、経営コンサルタントの大前研一氏が連載でアドバイスする。

現在、日本人の平均寿命は男79歳、女86歳です。ただし平均寿命とは、いま生まれた赤ちゃんが平均何年生きられるかという数字であり、その統計には若くして亡くなる人も含まれています。したがって、50歳以上まで生きた人の余命は、平均寿命よりも長くなりません。平均余命は60歳だと男22年、女28年。つまり、定年退職してから約20年の、元気で何でもできるセカンドライフがあるわけです。

ところが日本人の大半は、この長いセカンドライフの目的を持っていません。また、定年後の夢を持っていたとしても、それをかなえるための準備をしている人は少ない。定年後の準備は早く始めるに越したことはないのに、そのためのライフプランも描かずにいるのです。50歳になったらセカンドライフを充実させるためのプランを夫婦で設計し、趣味の腕を磨いたり会社以外の仲間や居場所を探したりする行動を起すべきです。

ファイナンシャルプランをライフプランと一致させる

さらに、日本人は定年後のライフプランを描いていないから、ファイナンシャルプランもありません。これは大きな問題です。たとえばアメリカの場合、一般

的には若い年代からライフプランを描いて一生を通じたファイナンシャルプランを設計し、35歳から45歳で定年後に向けた具体的な準備を始めます。30代でローンを組んで職場近くに家を買ひ、さらに将来移住したいと思ふような温暖な地域をバカンスのために家族連れで訪れ、気に入った場所に良い物件があれば、そこで別荘を購入します。また手持ちの資金は十分ではないので、借金して買ったり、いま住んでいる家を抵当に入れたりして買うわけです。

自宅のローンに加え、新たに購入する別荘のローンも40歳ぐらいから20年ぐらいいかけて払うことになりませんが、その間、別荘は運用会社に委託して貸し別荘にします。すると年間5〜6%の運用益が得られるので、それを借入金返済に回します。そして引退したら自宅を売却し、キャッシュに換えます。アメリカの住宅は耐用年数が100年ぐらいいあるので、価格も上昇するか、少なくとも維持はできます。したがって、それまでの貯金はゼロでも、住宅が貯金になっているわけでは、このころには別荘のローンも払い終わっているの、そこに移り住みます。結局、別荘が自分のものになり、ローンもなくなくなり、貯金が残ります。

あとは年金が入ってくるので、安心して貯金を使い、自由に趣味や旅行を楽しみながらセカンドライフを送ることができるわけです。

私は日本人もアメリカ人のように、ライフプランとファイナンシャルプランを一致させるべきだと思います。年金制度上、いま50歳以上の人は「逃げ切り世代」なので、定年後はお金が余ってきません。ところが、日本人はファイナンシャルプランを持っていないため、8割以上の人が余ったお金を墓場まで持っていくままです。世界では高齢者になると金融資産は目減りしていくのが普通ですが、日本人は年金の3割を貯金に回しているという統計があるほどです。だから高齢になればなるほど資産が増え、最後は平均3500万円もの資産を残してあの世に逝ってしまうのです。また、こうした事情のために資産運用にも熱心ではありません。1%以下の金融商品に平気で資産を寝かせています。定年後は年金と生保があるので、80歳の時に貯金はゼロでいいと、もし割り切ったら、65歳から15年間毎年250万円ずつ余計に使える計算になります。毎年250万円使うのは、けっこう大変です。25万円のヨーロッパ旅行に夫婦で年5回ずつ出かけねばなりません。

「いざいつ時に備えて貯金するのは意味がない」

なぜ日本人は年金も生命保険もあるのに定年後もせっせと貯金するのか？ 答えは「いざという時に備えて」です。では「いざという時」とは、どんな時なのか？

最大の不安は「病気になるなり、介護が必要になったりした時」です。日本人は年を取るとみんな介護が必要になると思っています。実際に介護の世話になる人は75歳〜79歳で15%。大半の人は自宅で大往生するかボツクリ逝く、あるいは病気になるって病院で息を引き取るといふパターンです。もうひとつの不安は、長生きした時です。80歳以上まで生きたらどうやって生活するのか、と心配している。もし、そうだったとしても、住む家も年金もあるから大丈夫だと思ふのですが、「葬式代ぐらひは貯金しておかない」と言う。そのくせ葬式にいづらかかるのか見積もりを取っている人は少ない。私に言わせば、「いざという時に備えて」というのは、考えることを放棄しているにすぎません。貯金は死ぬまでに使い切るといふ考え方に転換してセカンドライフを楽しむ。それが日本人にとって、重要なテーマだと思います。

KENICHI